



“メリケントキンソウ と サツマイモ”

園長 高杉 洋史

幼稚園の教育は環境を通して教育を実現するよう幼稚園教育要領に定められています。「環境」は社会一般で使われる言葉としての「環境」の意味にプラスして、友達や先生、家族や近所の方々などの人的環境や音楽や絵画、建築などの文化的環境も含み、早い話、総合的に子どもたちを取り巻く環境を整えることが必要なわけです。子どもたちが走りまわる運動場や、バツタやチョウを追いかける草の生えているスペースは生物の多様性に気づく大切な環境なわけです。ところが4・5年前からメリケントキンソウが侵入しました。南アメリカ原産の外来植物で、葉は杉苔のような優しい雰囲気草なのですが、小さな白い花の周りに、もっと小さな棘がたくさんついていきます。また結実すると種に鋭い棘があり、運動靴の底にささり、人が歩くことによりほかの場所に運ばれ繁殖するわけです。皮膚にささると危険なので4月下旬から地表を薄く削るように草刈りに励んでいます。子どもたちのバツタとりを妨害することになるのですが、とげが刺さるよりはよいだろうという判断です。6月上旬まで、刈っても刈っても新たに発芽していましたが、6月下旬になると発芽しなくなりました。きつと発芽に適した気温があるのでしょう。次の発芽時期は人にとってもさわやかな気候になる秋口です。それまで園長とメリケントキンソウの戦いは一時休戦です。その代わりサツマイモ畑や駐車場周辺の草刈りの季節です。主な草の種類はオヒシバとメヒシバ、スズメノヒエ、スズメノカタビラ、エノコログサ。これらの草が成長すると力を入れて引っ張ってもなかなか抜けません。芋の成長の邪魔もします。

サツマイモは6月2日と6月8日に苗を植えました。順調に育っています。子どもたちにとって野菜を収穫するというのは魅力的な活動のようです。洋ナシやイチジクは緑のピンポン玉の状態でもがれてしまします。それだけに秋のサツマイモほりの期待に添わないといけません。スーパーマーケットで売られるものは、手ごろな大きさでないと商品にならないのですが、子どもたちは大きなのを掘り上げることに満足感を感じるようです。そこでゆりの樹ファームの山路さんがトラクターで畝を作るときに有機肥料を入れてくれるのです。もう一つ大きく育てるコツは苗と苗の程よい間隔なのです。サツマイモの苗はほとんど根がなく、こんなのを畑に挿すだけで大丈夫かなという姿です。したがって、雨が降ることを予想して植えるわけです。天気予報が外れると、水をかけて回る必要があります。環境を整え、特に幼いときは手厚く面倒を見る必要があるのは子育てと共通するところがあります。

